九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

高校生男子における詰襟学生服着用時の快適性に関する研究 : サイズ　設計　素材の提案とその評価

河地, 洋子

https://doi.org/10.15017/1398254

出版情報：九州芸術工科大学, 2001, 博士（芸術工学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

第Ⅱ章
高校生詰襟学生服の快適性及びサイズに関する意識調査

Ⅱ-1　はじめに

現在の中学生、高校生のほとんどは学校で定められた制服を着用しており、一日のうち約8時間前後もの長い時間その制服を着用して生活している。高校生の制服はどの型が良いかのアンケート調査(野村　1994)によると男子は詰衿学生服が約50%、ブレザーが約35%という結果の報告が見られる。また詰襟学制服のかたちは、社会の変化に伴う問題や機能性の問題などが指摘されながらも、100年近く経った今日なお、色、デザインなど基本的には全く変化していない(松浦　1976)と言っても過言ではない。

このような学校制服であるが、その制服は着用者である生徒自身の所有物であると共に、学校という団体のイメージとしてのものでもある。そのため、学校制服のモデルチェンジやデザイン決定は主に学校の意向によって行われ、本来の着用者である生徒の意思がそこに反映されることは、近年になって多少の例も見られるが基本的には少ない。制服の検討は視覚的なデザイン、色、アイテム、価格等の着用させる側の意見が重視される傾向があるが、制服は学生にとって長時間着用している「生活着」という役割が大きいことからも、着用感や利便性などの着用者側の問題検討も重要であると考える。制服のイメージや制服の意義及び意識についての研究はこれまでに多数報告されているが（松浦　1976；　三井と酒井　1984；　杉本　1988；　川本ら　1988；野村　1994)、制服の快適性に対する意識やサイズについての報告は少ない。そこで制服着用者である生徒自身が感じている着用感に関する快適性及びサイズに関する問題点を把握することを目的にアンケート調査とその分析を行った。

高校での制服購入は3年間着用しうることを前提に、成長を考慮し大きめのサイズを選ぶ傾向がある。この成長を見込んだサイズの購入が果たして適正であるのかどうかの疑問を感じた。そこでサイズ設計の見直しや適切な見込みサイズの購入時の提案のための資料として、買い替えについての実態と入学時と卒業時の学生服サイズについての意識調査を行い分析を加えた。

Ⅱ-2　方法

Ⅱ.2.1　調査の概要

本調査は福岡県在住の16歳から18歳までの高校生男子、大学生及び専門学校生男子344名を対象に1999年11月から12月に質問紙による集合調査法及び配表留置法によって各クラスの教師を通じて回収した。

Ⅱ.2.2　調査内容

調査の為のアンケートの内容を表Ⅱ－1に示す。制服着用感の調査項目は、サイズ、重さ、色、デザイン、着心地、値段、保温性、活動性、着脱性、衛生面、窮屈感の11項目とし、評価方法は5段階評価法を用い、1を不満回答、5を満足回答とした。

サイズに関しては入学時のサイズ意識、卒業時のサイズ意識の2項目とし、評価方法は入学時のサイズが「丁度よかった」、「少し大きかった」、「とても大きかった」の3段階、卒業時のサイズを「小さかった」、「丁度良かった」、「大きかった」の3段階での評価とした。現役高校生は、入学時のサイズ意識のみの回答を依頼した。

さらに、サイズが合わなくなって学年の途中で購入した服つまり買い替えの服種を尋ねた。

Ⅱ.2.3　集計及び分析方法

制服に対する意識については、調査項目について平均値を求めマン・ホイットニーのU検定及びクロス集計と独立性の検定を行い意識の差異を明らかにすることとした。サイズについては入学時卒業時別のクロス集計及び独立性の検定を行いサイズの適合の実態を把握することとした。今回のサイズの分析では着用服種別（詰襟学生服、ブレザー、その他）でも行ってみたが、服種間での違いが見られなかったので、すべての服種の合計結果を分析した。

表Ⅱ－1　アンケート内容

冬用スクールユニフォームについてのアンケート

1)年齢　(　　)歳

2)性別　1. 男　2. 女

3)どのような制服を着用していますか(または着用していましたか)。簡単に記入してください。

例:
ジャケット　:紺の2つ釦のブレザー
ボトム　:グレーとブルーの小さいチェック柄の襞スカート
シャツ　:衿に校章の刺繍の入った白のブラウス
ネクタイ　:エンジのリボン

ジャケット:
ボトム:
シャツ:
ネクタイ:

4)冬用制服を着用していて感じたことについて該当する番号に○印をつけてください。
(卒業生は高校時代を思い出してください)

A)サイズ　小さい　普通　大きい　5 4 3 2 1

B)重さ　軽い　普通　重い　5 4 3 2 1

C)色　満足　普通　不満　5 4 3 2 1

D)ﾃﾞｻﾞｲﾝ　満足　普通　不満　5 4 3 2 1

E)着心地　良い　普通　悪い　5 4 3 2 1

F)値段　安い　普通　高い　5 4 3 2 1

G)保温性　暖かい　普通　寒い　5 4 3 2 1

H)活動性　動きやすい　普通　動きにくい　5 4 3 2 1

I)着脱性　便利　普通　不便　5 4 3 2 1

J)衛生面　清潔　普通　不潔　5 4 3 2 1

K)窮屈感　着やすい　普通　窮屈　5 4 3 2 1

5)制服のサイズについて該当する番号に○印をつけてください。(卒業生は高校時代を思い出してください)

A)入学時のサイズ　丁度良かった　少し大きい　とても大きかった　3 2 1

B)卒業時のサイズ　小さかった　丁度よかった　大きかった　3 2 1

C)サイズが合わなくなって学年の途中で購入した服がありましたら○印をつけてください。

男子用制服(冬用)　1. ジャケット　2. 詰襟上着　3. ｽﾞﾎﾞﾝ　4. カッターシャツ　5. コート　6. その他(　　)

女子用制服(冬用)　1. ジャケット　2. セーラー服上着　3. スカート　4. ｼﾞｬﾝﾊﾟｰｽｶｰﾄ　5. カッターシャツ　6. ブラウス　7. コート　8. その他(　　)

D)制服のサイズについて何か希望や意見がありましたら記入してください

[　　]

6)制服の中に取り入れたい服種があれば、番号に○印をつけてください。

1. コート　2. レインコート　3. ジャンパー　4. カーディガン
5. ベスト　6. セーター　7. ポロシャツ　8. トレーナー
9. 女子用スラックス 10. キュロットスカート　11. その他(　　)

Ⅱ-3　結果

Ⅱ.3.1　アンケート回答の概要

回答者を現役と卒業者別に見ると表Ⅱ-2のように男子では35%が現役、65%が卒業生であった。

本調査での着用制服は表Ⅱ-3に示す通り男子では25%がブレザー、68%が詰襟、その他が7%の服種であった。

表Ⅱ－2　アンケート回答者 現役、卒業生別人数

性別 / 所属	男子	
	人数(人)	%
現役	121	35
卒業生	223	65

表Ⅱ－3　アンケート回答者 着用制服別人数

性別 / 服種	男子	
	人数(人)	%
ブレザー	86	25
詰襟	235	68
その他	23	7

Ⅱ.3.2　制服着用意識

アンケート調査項目のうち制服の着用意識について重さ、色、デザイン、着心地、保温性、活動性、着脱性、衛生面、窮屈感の9項目について満足不満足の差異を明らかにする為、平均値の有意差をマン・ホイットニーのU検定で又クロス集計及び独立性の検定を行った。男子の集計結果を表Ⅱ-4と図Ⅱ-1に示した。この図は中心が不満を外側が満足を表した図である。男子において5段階評価で平均が2.5以下の項目は窮屈感と活動性であり不満傾向が強い項目であった。活動性と窮屈感において5段階評価の割合を見てみると、不満が強い着用意識の活動性では、30%が「動きにくい」で「やや動きにくい」の29%を含めると合計59%の人が不満を持っていることが解った。窮屈感においても、24%が窮屈としており、やや窮屈の25%を含めると合計49%の男子生徒が窮屈感を感じていることが解った。

次に着用している制服の服種別にどのような意識の違いがあるかを見るために、着用服種別の集計を行った。回答者の中で男子はブレザータイプ25%、詰衿学生服を68%の男子生徒が着用しておりそれ以外の服種は合わせて7%に留まっていた。そこでブレザーと詰衿学生服の服種の比較を行った。(表Ⅱ-5)

男子のブレザーと詰衿学生服の着用意識について、9項目について平均値の有意差をマン・ホイットニーのU検定（図Ⅱ-2）とクロス集計を行い独立性の検定（図Ⅱ-3）を行った。平均値の有意差検定結果では、詰襟学生服において色、重さ、窮屈感、衛生面、着脱性、活動性、保温性の7項目で危険率1%もしくは5%未満で有意な差が認められた。詰襟学生服において不満が有意に大きかった項目は、重さ、窮屈感、衛生面、着脱性、活動性の5項目であった。

クロス集計の結果を見ると不満の大きい項目のうち危険率1%未満で詰襟学生服が有意であったものは窮屈感と活動性であり、危険率5%水準では着脱性であった。窮屈感は、26%の人が窮屈とし28%の人がやや窮屈で合計54%の人が窮屈と感じていた。活動性において、36%が動きにくいことを訴え、32%のやや動きにくいを含めると68%の高い割合で不満が読み取れた。窮屈感と活動性は連動しており、この結果は予想される結果である。

保温性についてブレザー着用者の66%の生徒が寒いと感じていた。

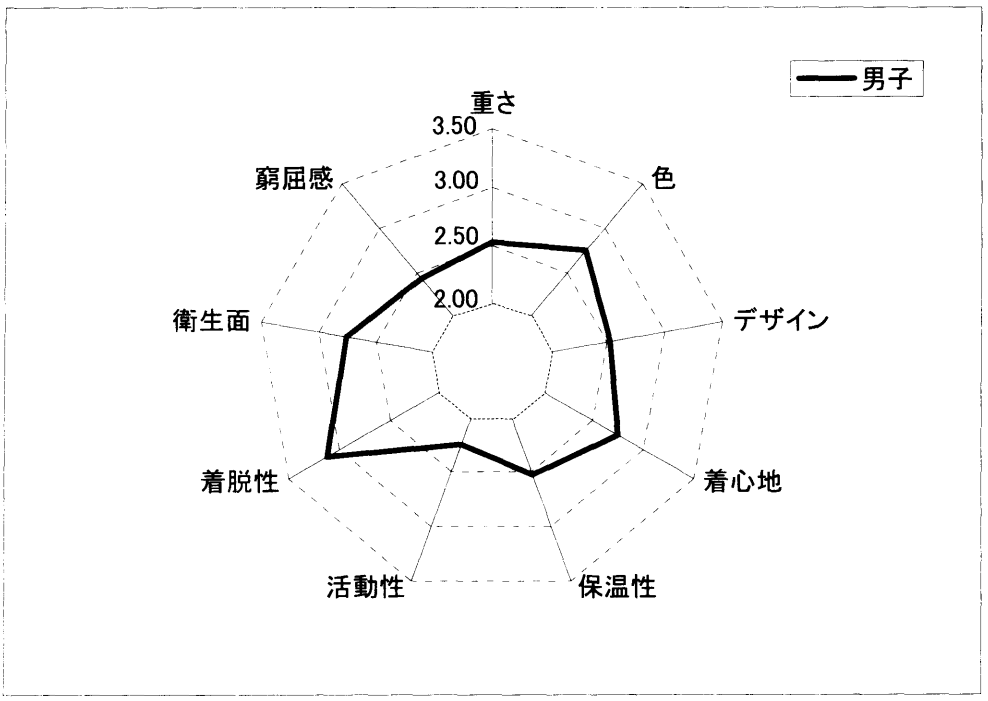
着脱性についてはブレザーより詰襟学生服に危険率5%水準で不満が見られた。

ブレザーと詰襟学生服の独立性の検定結果において、重さ、デザイン、着心地、衛生に関しての差は認められず、色と保温性に関しては詰襟学生服の方が不満が少ない評価であった。

表Ⅱ-4　男子集計結果の平均

n=344

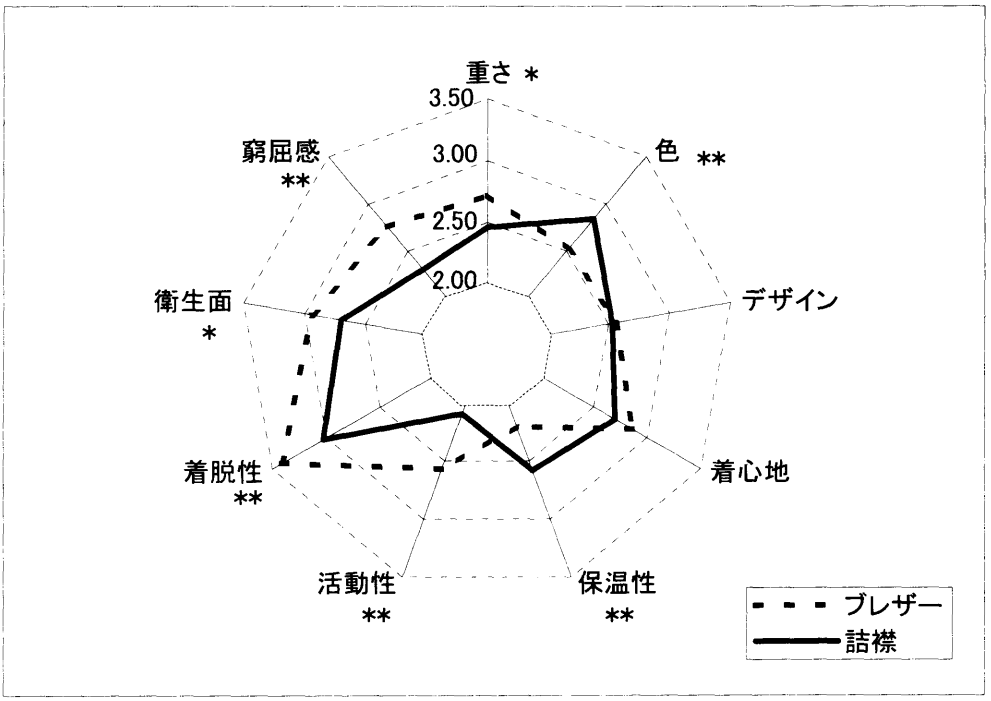
項目	平均	SD	有効回答数
重さ	2.53	0.85	343
色	2.75	0.99	343
デザイン	2.53	1.05	343
着心地	2.75	1.06	338
保温性	2.53	1.10	339
活動性	2.25	1.09	339
着脱性	3.12	1.00	338
衛生面	2.76	0.88	338
窮屈感	2.44	1.07	336



図Ⅱ-1　平均値の比較

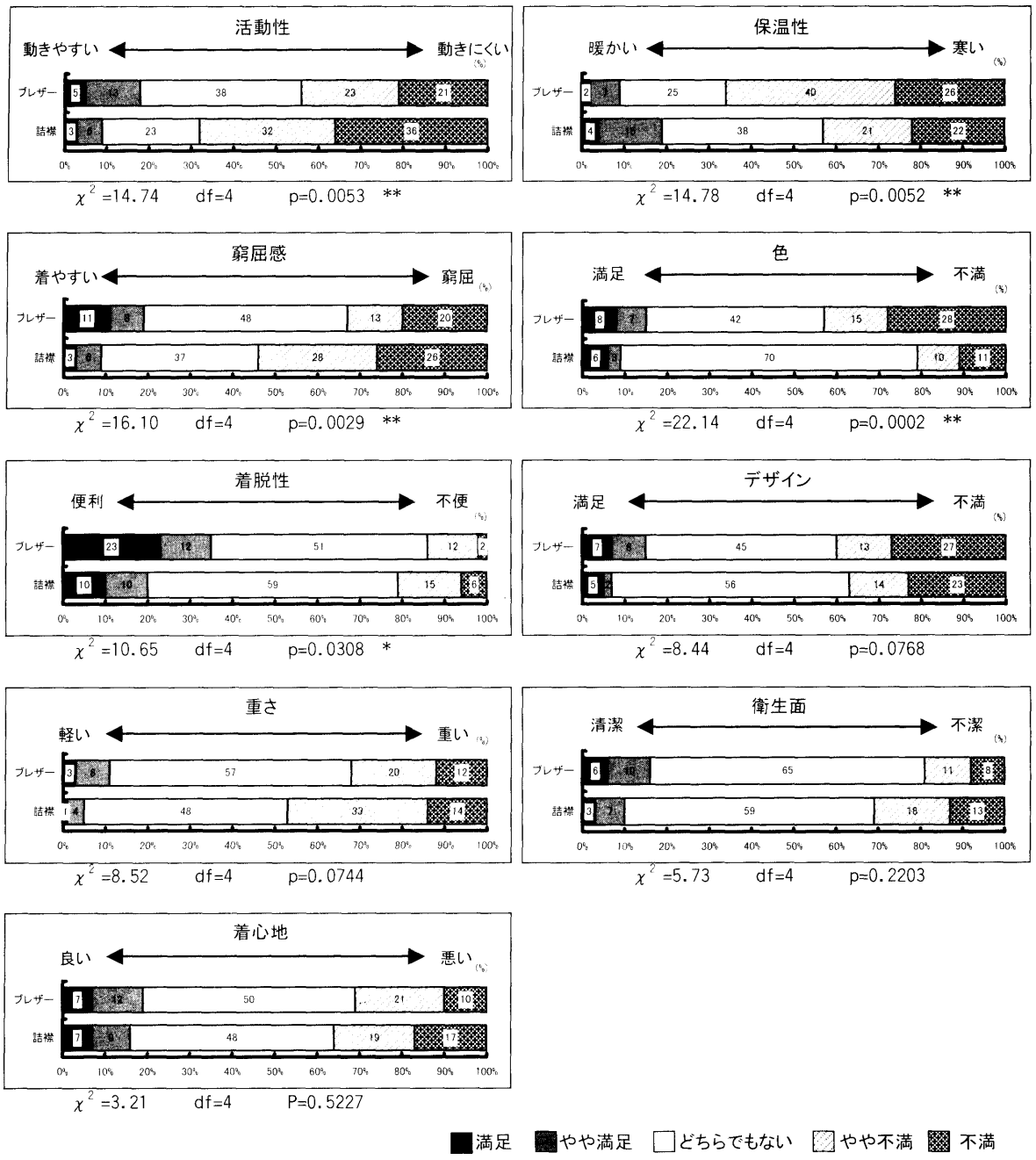
表Ⅱ-5　ブレザー・詰襟学生服別意識項目の集計結果

服種 / 項目	ブレザー(n=86)			詰襟学生服(n=235)		
	平均	SD	有効回答数	平均	SD	有効回答数
重さ	2.72	0.90	86	2.46	0.83	235
色	2.52	1.21	86	2.84	0.90	235
デザイン	2.56	1.17	86	2.53	1.02	235
着心地	2.86	1.00	84	2.70	1.08	233
保温性	2.20	0.99	84	2.58	1.10	234
活動性	2.57	1.11	84	2.09	1.04	234
着脱性	3.41	1.05	83	3.03	0.96	234
衛生面	2.94	0.88	84	2.70	0.88	233
窮屈感	2.76	1.20	83	2.31	1.01	232



**:p＜0.01
*:p＜0.05

図Ⅱ-2　ブレザー・詰襟学生服意識項目の平均値の比較



図Ⅱ－3　服種別クロス意識項目集計結果

Ⅱ.3.3　制服のサイズ意識

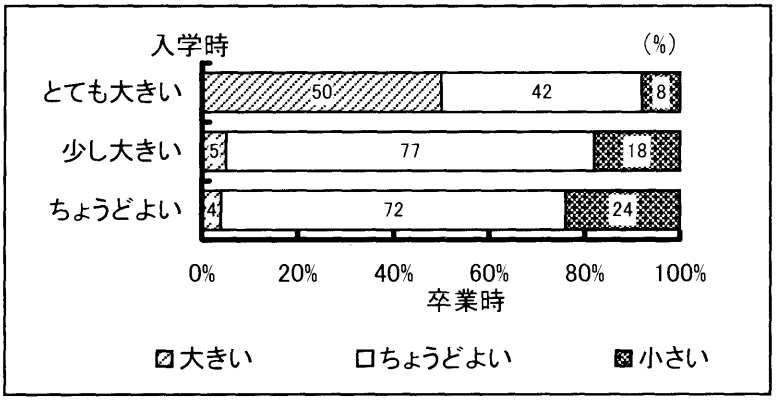
3年間での制服の買い替え状況を表Ⅱ-6に示す。男子ではジャケットで12%、詰襟で16%、ズボンで35%、シャツで16%の人が買い替えをしていた。特にズボンは全体の3分の1以上が買い替えていることになる。

約20年前では中学高校在学中に上着は最低2着購入し、シャツは3～4着買い替える人もおり、ズボンは最高で6本程度買い替えを行っていたとの報告が見られる（椋田　1980)。この時代に比べると今回調査では買い替えは少なかった。

男子の入学時と卒業時のサイズ意識の関係から入学時の購入サイズの見込み違いを調べるために、入学時と卒業時のサイズ意識についてクロス集計を行った（図Ⅱ-4)。3年間でジャケットを買い替えた10名と詰襟38名を除き273名を対象とした。卒業時に制服が小さくなった男子の内訳は、入学時のサイズ意識別に見ると「とても大きい」と感じて購入した人8%、「少し大きい」と感じて購入した人18%、「ちょうど良い」と感じて購入した人24%であった。入学時にとても大きいと感じて購入し着用していた人で50%が大きいと意識したままで卒業していた。しかしとても大きいと感じて購入した人の中にも卒業時ちょうどよいサイズであったと感じていた人は42%、またちょうどよいサイズの服を購入した高校生の内24%が卒業時は小さく感じたとの結果を得た。

表Ⅱ－6　男子制服買い替え状況

服種	着用人数(人)	買い替え人数(人)	%
ジャケット	86	10	12
詰襟	235	38	16
ズボン	321	112	35
シャツ	321	52	16
コート	321	2	1
その他	321	10	3



χ^2 =58.46　　df=4　　p＜0.01　　**

図Ⅱ－4　男子入学時卒業時別サイズ意識のクロス集計結果

Ⅱ-4　考察

16歳～18歳までの高校生、大学生及び専門学校生男子344名に詰襟学生服に関する意識調査を行った。

制服着用意識において、特に不満が強い意識は窮屈感と活動性であった。詰衿学生服に対するイメージに及ぼす要因についての調査の中でも、男子が詰襟学生服を嫌う理由として着心地の悪さが最大の原因とされている（松浦：1976)。今回の調査においても、着心地を左右する窮屈感及び活動性において不満が強くみられていた。

次に着用している制服の種類別にどのような意識の違いがあるかを詰襟学生服とブレザーの比較をおこなった。男子のブレザーと詰衿学生服の着用意識についての平均値の有意差検定結果では、詰襟学生服において色、重さ、窮屈感、衛生面、着脱性、活動性、保温性の7項目で危険率1%もしくは5%未満で有意な差が認められた。詰襟学生服において不満が有意に大きかった項目は、重さ、窮屈感、衛生面、着脱性、活動性の5項目であった。クロス集計の結果を見ると不満の大きい項目のうち危険率1%未満で詰襟学生服が有意であったものは窮屈感と活動性であり、5%水準では着脱性であった。

窮屈感は、詰襟学生服で26%の人が窮屈とし28%の人がやや窮屈で合計54%の人が窮屈と感じていた。窮屈感は服全体からと肩、背中、腕、首周り等から受ける感覚が考えられる。首周りは従来から問題にされており「くびのあたりが窮屈で圧迫を感じる」「下を向いたときのどが苦しい」のパーセンテージが高いという報告（杉本　1988）とも類似した結果となった。しかし詰襟学生服の肩、背中、腕の窮屈感に関する研究は見られない。

活動性においても詰襟学生服で、36%が動きにくいことを訴え、32%のやや動きにくいを含めると68%の高い割合で不満が読み取れた。

窮屈感と活動性は連動しており、この結果は予想される結果であった。

保温性についてブレザー着用者の66%の生徒が寒いと感じていた。アンケートのコメントを見るとブレザー着用者の中には胸元の開きが寒さを感じる要因であると思っている生徒が多くみられ、一方詰衿学生服着用者は詰衿学生服の下に着ているものが見えないためセーターやトレーナーなどの学校指定以外のアイテムを自由に着用できるという意見があった。詰襟学生服着用者の保温性に関する意識に満足度が高いのは、学生服の中での衣服の調整がやりやすい為であると考える。

着脱性についてはブレザーより詰襟学生服に危険率5%水準で不満が見られるが、これは胸元が開いているかいないかつまりボタンの数によるところが大きいと思われるが、保温性の点では胸元が詰まっている詰襟学生服への満足度が高い点を考えると、ファスナーやマジックテープのような留め方の方法で解決出来るのではないかと考える。

以上のように、詰襟学生服とブレザータイプの学生服では着用意識が異り、詰襟学生服のおいての利点も読み取れたが、窮屈感及び活動性において強い不満意識がみられた。

「制服廃止の予想に反し、肯定されている」という報告(松浦　1976)や「制服に対する実用的機能については、便利さでは良いとしていた」という報告(川本ら　1988)がみられる。また「学校としては制服を着せることによるメリットは大きい。生徒たちも制服があるほうが便利で良いという。約50%の生徒が詰襟学生服を支持している。」(野村　1994)との報告もみられる。このように制服の存在意義や生徒からの支持が強いことを考えると、学校制服は生徒にとって通学時、校内での授業時、その他の学校生活時に快適な衣服であるべきである。その為には、未だ研究が見られない詰襟学生服の肩、背中、腕の窮屈感及び活動性に関する研究が必要と考える。

次に制服のサイズ意識について述べる。

男子の入学時と卒業時のサイズ意識についてクロス集計を行った（図Ⅱ-4)。3年間でジャケットを買い替えた10名と詰襟38名を除き273名を対象とした。卒業時に制服が小さくなった男子の内訳は、入学時のサイズ意識別に見ると「とても大きい」と感じて購入した人8%、「少し大きい」と感じて購入した人18%、「ちょうど良い」と感じて購入した人24%であった。入学時にとても大きいと感じて購入し着用していた人で、50%が大きいと意識したままで卒業していた。

以上のサイズに関する意識調査の結果から、メーカー側のサイズ設定方法及び消費者側の成長を見越したサイズの購入方法に問題があることが示唆された。

今後は、入学時の生徒の身体特徴とその後の成長との関係、またそれらを考慮したサイズ設定及び成長を見越したサイズ選択方法等の研究が必要であると考える。

以上の意識調査の分析より、学校制服デザイン企画にはデザインや色といった視覚的な問題より、活動性や窮屈感等、サイズを含んだ身体と関わりの深い機能的要素を充分考慮したデザイン展開が必要であると考えられる。